

【特別寄稿】

森のようちえんにおける地域連携の一事例 —ぼかし肥作製から始まる農業体験実践報告— 内保 亘*

A Practice Report about the Collaborative Link between Waldkindergarten and Community —An Agricultural Experience to begin from Making Fertilizer— NAIHO Wataru

近年森のようちえんを初めとする自然保育活動が、日本全国に広がりつつある。長野県旧八千穂村に2年前に開園した森のようちえんちいろばは、森のようちえんが有する新しい地域連携の可能性を、地域に暮らす有機農家との連携の観点から、「ぼかし肥作りから始まる農業体験」をテーマに実践を深めてみることにした。本稿では、ぼかし肥作製の中でみせた子ども達の姿を追い、保育活動としての一つの事例を示すこと、また、ぼかし肥を通して生まれた地域連携の在り方とは何かを考え、この実践から考えられる今後の地域連携の可能性を探ってみたい。

キーワード：森のようちえん、地域連携、有機農家、農業体験、ぼかし肥

1. はじめに

1.1. 森のようちえんとは

近年、森のようちえんを初めとする自然保育活動が、日本全国で広がりをみせている。基本的には、小さな個人団体の草の根運動的に発展をみせているが、近年行政がその活動への積極的な関与を表明するような事例も出てきた。今年度長野県は、森のようちえんの活動が、信州の自然を主体とした保育活動推進に大きく貢献することを期待して、「信州型自然保育団体認定制度^①」なるものを目下作成検討中である。

その長野県東信に位置する南佐久郡佐久穂町の旧八千穂村において、3年前の2012年9月23日に産声をあげたのが「森のようちえん ちいろば^②」である。

森のようちえんは、「①自由に遊びこむこと、②動植物や他者とかがわること、③五感を使って自然や命を感じること」（今村 2011, 142）を基本的な暗黙の共通理念として持ってはいるが、統括機関は存在せず、自然発生的に開園する団体が多いため、保育内容や保育方針等、主

催者個人の問題意識や想いが園そのものを形成している。したがって、森のようちえんを定義するものは、現段階では存在せず、各園、園の置かれた環境や幼児、保護者に合わせた保育活動を独自の方法で展開し、それを特色としている。ちいろばもまた、そのような森のようちえんの一つとして開園したのだが、ちいろばの特色としてはどのようなものがあるのだろうか。

1.2. ちいろばの地域連携と農業体験

ちいろばは、地域連携を大きな特色としている。旧八千穂村という地域に根差した文化や広大な自然環境を活かし、保育者だけでなく、地域に暮らす人々にも、子ども達に関心を持ってもらい、保育活動そのものに関わっていく、ということを理想としている。ちいろばは、様々な分野の方々からの支援によって生まれたのだが、ちいろば保育を支える最も大きな柱の一つに地域に点在して暮らす有機農家がある。旧八千穂村に、およそ30年前から新規就農し、現在に至るまで提携という関係性にこだわってき

*森のようちえん ちいろば代表・園長

た有機農家「織座農園」の農園主である窪川典子氏は、今年度から農園の一角にある森や畑をちいろばの活動場所として提供して下さり、更には保育における農業体験において、日常から主体的に関わって下さっている。保育者もまた、子ども達と同じように、五感を使って農業を体験する立場に身を置き、その命の成り行きを、感動をもって見守っていくところに、本来の体験の姿があり、また本当の共感が生まれる。森のようちえんの醍醐味は、こうした子どもも大人も共に、人として本物を直に感じていく場である、というところにある。

1.3. 本稿の目的

今年度は、織座農園との連携から何ができるかを考えたときに、窪川氏との話し合いから「ぼかし肥作りから始まる子ども達の農業体験」というものが浮かび上がってきた。本稿では、このテーマのもと、子ども達が一体どのような姿をみせたのかを、実践報告という形で論じ、この活動を通じて筆者が感じ得た地域連携の可能性を模索することを目的とする。実践報告に関しては、特に実践第1週目～2週目におけるぼかし肥作製活動の中で、非常に興味深い子ども達の姿が窺えた為、本稿ではこの期間の実践推移に注目して報告することとした。前提として、ぼかし肥がどのような形で農作物の生長に寄与したかということではなく、子ども達がどのようにぼかし肥作製に関わったか、ということに着目して論を進めたい。

2. 活動に向けて

2.1. 経緯と前提

昨年度は、地域の耕作放棄地をお借りし、種蒔きから、畑作り、植え付け、除草や追肥等の管理、収穫を子ども達と共に経験したが、管理の大部分は保育者が携わり、子ども達が興味を持って主体的に農業に関わったとは言い難い。保育者も、農業に関する知識を豊富に持ち合わせているわけではなく、行き当たりばったりの

活動になり、子ども達の好奇心を刺激するどころか、ただ保育者がどうしたらいいのかわからぬまま活動が流れていったという場面も多々あった。

今年度は、昨年度の反省を踏まえ、より子ども達の興味と関心が農業に向くようにと考え、地域連携の観点から、旧八千穂村の織座農園の窪川氏の協力を仰ぎ、専門的な見地からちいろばの農業体験活動を充実できぬものかと考え、企画し、賛同を得た。

窪川氏によると、今年2月に降り積もった未曾有の大雪の影響で、腐葉土を根雪から収集できず、標高1000m前後に位置する旧八千穂村のような寒冷地の苗作りには欠かせないビニールハウスでの腐葉土踏み込み温床は断念し、その代替案として、今年初めて、ぼかし肥作製時に発生する発酵熱を利用した苗床を試みるとのことであった。その作業を、ちいろばの農業体験としても是非取り入れたいと願い出た所、「ぼかし肥作りから始まる子ども達の農業体験」が今年度のちいろば保育活動におけるテーマの一つとして浮上した。

ぼかし肥とは、堆肥よりも手軽に作れる家庭菜園向きの有機肥料であり、「油カスや米ヌカなどの有機質肥料に山土や粘土、モミガラなどを混ぜて発酵させた肥料」(農山漁村文化協会編集部 1993, 24)である。ぼかし肥は、本来元肥や追肥として使うものだが、今回は織座農園に倣い、踏み込み温床に変わる発芽用の苗床として子ども達と作製し、苗が定植できる程度にまで育った後、畑の追肥として余すところなく使用することとした。

今年度は昨年度と同様、農業体験は種蒔きから収穫までの全ての工程を子ども達と責任を持って行うこととした。子ども達が自分自身で選んだ種類の野菜を責任持って育て、収穫した後、美味しく食べるということが大きな目標だが、今年度は、ぼかし肥との関わりをテーマに、保育者は子ども達が何を感じ、何を思うか、実践時の言動に注目し、その姿を観察し所見を深

めるということに、集中することとした。

保育者自身も、ぼかし肥作製は初めての経験となるため、農業経験値の高い窪川氏の指示と助言を仰ぎながら、子ども達と共に目の前で起こることを一つ一つ確認、共有しながら実践を深めていった。

2.2. 参加者と実践場所

本実践に携わったのは、窪川氏、保育者3名、児童10名（年長3名、年中2名、年少3名、2歳未満児2名）の計13名であった。

場所は、織座農園のビニールハウスの一部と、そこに隣接する畑をお借りすることとなった。ぼかし肥作製は、このビニールハウスで行うこととした。

保育をする場所も、今年度は園舎周辺ではなく^③、荒天日を除き織座農園を拠点に活動することとし、子ども達が遊びながらも、毎日農業体験ができるような環境設定とした。

また、ちいろばは少人数からなる縦割り保育のため、どの年齢の子も同時に実践に参加することとした。

3. 実践報告

3.1. 導入

3.1.1. 平成26年4月11日（金）

今年度の保育開始から3日目のこの日、織座農園の窪川氏主導のもと、ぼかし肥の説明から始まる導入が行われた。窪川氏が、自らの農園で既に試みているぼかし肥の作製場所に子ども達を誘導し、図1のように、実際にぼかし肥に触れてみる体験をした。「うわあ、温かいね。温泉みたい」と、年中Hちゃんが言うと、皆口々に「温かいね」、「気持ちいいね」と体感を言葉にする。「バナナみたいな匂いがするね」と2歳未満児K君の言葉のように、匂いにも気づきを得た子どももいた。窪川氏が、「こうして、お団子にしたり、こねたりしてみて」というと泥遊びさながら、ぼかし肥で各自思い思いに遊んでみた。ぼかし肥には湿り気があり、握ると手

の中で塊になる。窪川氏は、耳たぶくらいの固さが、程よい水分量の証であることも教えてくれた。

その後、ぼかし肥ではなく、普通の土の中に手を入れてみると、子ども達は思わず「冷たい！」と叫んだ。ぼかし肥の温かい理由が、発酵しているからということも、肌で実感した。窪川氏が「発酵には微生物っていう、目には見えない小さな生き物が大事なの。ぼかし肥の中には、その微生物がたくさん住んでいて、みんなみたいにご飯を食べたりすると、熱を出すの。それで、温くなるのよ」と、発酵という言葉の説明をすると、子ども達は「ふーん」といいながら、感慨深げに、改めて温かいぼかし肥に手をうずめていた。

窪川氏にビニールハウスの一角をお借りすることとなり、「ここで、ちいろばのぼかし肥を作ってみよう。」と保育者が誘うと、「やろうやろう！」と言いながら、子ども達は作製場所を確保するために、年長児を中心に、農園の荷物を片づけ始めた。その後、窪川氏がしていた様に、



図1 ぼかし肥に初めて触れてみる

ビニールシートを敷いておいた。帰りの会で、今日のことを振り返り、来週明けには、早速ぼかし肥を作ることを皆で確認した。

3.1.2. 平成26年4月14日(月)

自分達でぼかし肥を作る日がやってきた。朝の会で今日の予定を子ども達に確認すると、年長、年中児の半数はぼかし肥作製のことを覚えていた。

金曜日に作っておいたビニールハウスのぼかし肥作製場所に集まると、前日から窪川氏が山土15Kgと米ぬか15Kgをそれぞれ用意してくれていた。窪川氏によると、ぼかし肥作製には様々な方法があるが、子ども達にもわかりやすくするため、材料も山土と米ヌカの2種類とし、分量も同量で試みてみては、ということであった。今回の実践を見た上で、来年度以降使用する材料は再度検討することとし、今年度は山土と米ヌカのみを使用に限ることとした。

まず、図2のように、山土全量をビニールシートの真ん中に配置した。次に、図3のように、米ヌカ全量を山土の上に被せ、その次には図4(次ページ)のように、手で山土と米ヌカをよく混ぜ合わせた。先週の金曜日とは違い、普通の土のようにまだ冷たさがあることを皆で実感しながらかき混ぜていった。匂いもまだほぼ無臭であった。よくかき混ぜた後、全体の色が湿って変わる程度に、水を順番にかけ、更に混ぜ込んでいった。窪川氏が「お団子が作れるくらいまで水をあげるんだよ」と言いながら、実際に土団子を作ると(図5:次ページ)、子ども達も真似をしながら、しばらく土団子作りで遊んでいた。ここでは、あくまで感じる体験が大事なため、水分量は何%かと意識せず、触ったり丸めたりしてその量を調整することで、子ども達が主体的にぼかし肥作製に集中することを狙ってみた。

実際に子ども達にとって、数字はそれほど大事ではなく、手を動かして遊ぶことが大事であり、その関わりが活動の継続性を生むのである。



図2 山土を配置する



図3 米ヌカを山土に被せる



図4 山土と米ヌカを混ぜ合わせる



図5 ぼかし肥団子を作る窪川氏と年中児

本実践も、遊びの要素があったため、誰も嫌がらずに活動していた。遊びながら、かき混ぜ作業を終えた後、日光にさらした状態にしておいて、1日目は終了。夜はまだ寒く、霜の降りる日もあるため、発酵にある程度の外気温を確保すべく、降園前に毛布を上にかぶせ、温度計を差しておいた。「まるで、人間みたいだね」と、年長Mちゃん。その言葉に窪川氏が、「いい所に気づいたね。だって、生き物だからね。寒いから、皆と同じようにお布団が必要なんだよ」と答えたと、Mちゃんは笑顔で納得していた。

3.2.3. 平成26年4月15日(火)

朝は予定が入っていたために、昨日のぼかし肥を確認するのは、昼食後となった。早朝、窪川氏が、温度が上がりすぎること懸念して、布団をはがして置いて下さった。

年長児に温度計をチェックしてもらおうと、なんと20℃にまで上がっていた。皆で手でぼかし肥に触れてみると、「わ、少し温かいね」と子ども達は昨日よりも灰かに温かくなったことを実感した。

降園時、再び毛布をかけておいた。その際、昨日「人間みたい」と言った年長Mちゃんが、「ゆ〜りかご〜の〜」と「ゆりかごの歌」を歌い始めたので、皆も一緒に子守唄のようにして歌い始めた(図6:次ページ)。これは、Mちゃんが、目には見えないけれども、人間と同じようにこの土の中には生命があることを実感した証であろう。

この日のぼかし肥温度は46℃と高く、子ども達も思わず「熱っ!」と言いながら、手をぼかし肥の中に入れていた。「昨日はまあまあだったのに、今日はすごいね!」と興奮気味に話す年長Aちゃんの言葉に、感動が見てとれる。窪川氏が、「そうなのよ。微生物の力ってすごいでしょ」と、不思議さと驚きに包まれている子ども達の言動に共感の言動に共感しながら答えていた。保育者もまた、3日目にして見えた成果に、驚きと感動を覚えた。



図6 「ゆりかごの歌」を歌う子ども達



図7 種蒔きをする2歳未満児

3.2.4. 平成26年4月16日(水)

この日から当園と同時に、ぼかし肥を見に行く子も出始めてきた。ぼかし肥との関わりが、子ども達の園生活の一部であることが、徐々に認識され始めてきたのである。窪川氏が、「ここまで温度があがると、かえしをしないとね」といって、子ども達に水を持ってくるよう指示していた。「かえし」とは、「切り返し」のことで、窪川氏によると、有機物の分解には酸素を大量に消費するらしく、ぼかし肥の温度が50℃前後になった際、切り返して、酸素供給と通気性の確保を行う必要があるとのことであった。子ども達には「ぼかし肥も生き物だから、下の方の微生物が息できるように上の方に持ってくるのよ」と言いながら、新たに水を混ぜつつ、子ども達とぼかし肥を切り返した。

3.2.5. 平成26年4月17日(木)

ぼかし肥の温度は52℃。昨日同様、子ども達と切り返しを行う。「なんか、いい匂いがしてきたね」と子ども達が匂いに気づく程、発酵が大分進んできていた。

この日は、第一弾の種蒔きの日で、図7のように、ミニトマトや、ピーマン、ナス、バジル、キュウリといった野菜の種を、「美味しくなあれ」と言いながら、培養土に一人ずつ蒔いていた。

ぼかし肥の温度がまだ安定せず、上がりすぎてしまう可能性もあるとのこと、落ち着くまでは、農園の温床をお借りして、発芽を促した。

3.2.6. 平成26年4月18日(金)

ぼかし肥の温度は50℃。子ども達の切り返しの手つきも様になってきた。相変わらず、いい香りもして、「何だか、お腹すいたね」という年少Tちゃんの言葉に、皆笑顔で共感していた。

ぼかし肥に変化が見られたのはこの日。切り返していると、下の方から、ぼかし肥の塊が出てきた。早速気づいた年長S君が、「典子さん(窪川氏)、これなあに？」と尋ねると、窪川氏が「い



図8 ぼかし肥の塊を砕く子ども達



図9 トラクターを見物する子ども達



図10 ぼかし肥の塊「はんぺん」を手にする左から二番目の年中児

いものに、気が付いたわね。この塊があるという事は、ぼかし肥作りがうまくいっている証拠よ。この中に、いっぱい微生物がいるから、

ちゃんと砕いて混ぜてね」と答えていた。そう言われて、図8のように、皆塊を見つけては、指で練ったり、折ったりして、混ぜ込んでいく。「ここにもあった」、「あ、ここにも！」と方々で発見の楽しさをうかがわせる声があがった。毎日、何かしらの変化が見えるせいか、子ども達の実践への興味・関心にもますます拍車がかかる。

この日は、織座農園では、子ども達のフィールドの横でトラクターをかける日であった。図9のように、突然大きな音と共にやってくる大きなトラクターに子ども達の目は釘付けとなった。農園の生活が見えるこの環境は、子ども達の好奇心を満たしてくれる要素が多々存在し、農業体験へのモチベーションも大いに高めてくれる。

3.2.7. 平成26年4月22日(月)

前日の21日は、ぼかし肥の温度も46℃と落ち着きを見せてきていた。翌日の今日は、またぼかし肥に変化が見られた日であった。

子ども達がこの日も先週と同じように切り返していると、ぼかし肥の底の方に、およそ30cm四方の巨大なぼかし肥の塊を発見したのであった。年少Nちゃんがそれを見て、「はんぺん」と名付け、それ以来、はんぺん争奪戦が始まった。誰が一番大きなはんぺんを見つけるかで、争いごっこをしながらも、子ども達が切り返す手の動きも一層早くなってきた。はんぺんを見つけては、大きさを比べ、更に砕いていく遊びも始まった。「見てほら、クッキーだよ」などと、「はんぺん」を砕いたら「クッキーになる」といった見立て遊びをしていた子も中にはいた

(図10)。子ども達のぼかし肥との関わりも、大分深まってきたことを感じた1日であった。ぼかし肥の温度も落ち着いてきたため、今日から、このぼかし肥の上で発芽を待つことにした(図11:次ページ)。本来ぼかし肥は、このあたりの段階で、発酵熱により乾燥させ、さらさらの状態にまでしたら肥料として完成なのだが、



図11 培養土ケースをぼかし肥の上に置く

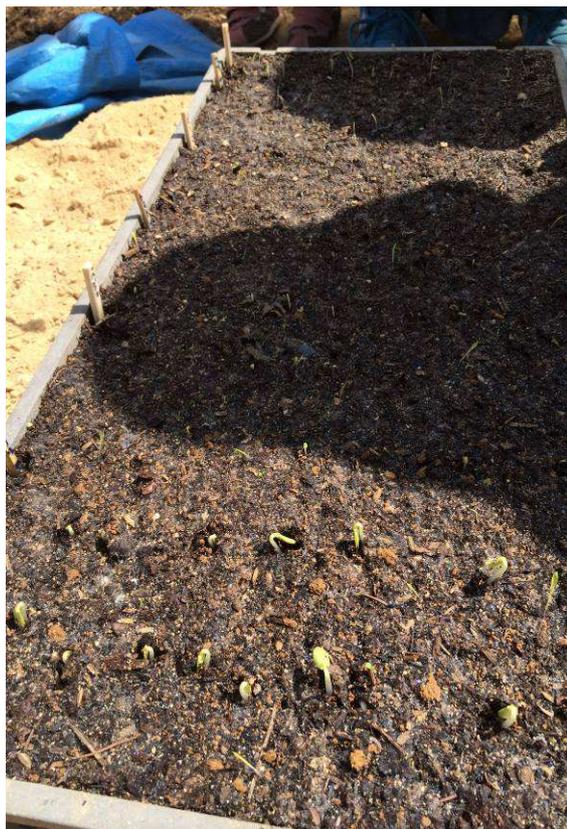


図13 初めての発芽の様子



図12 畑作りをする年少児

今回の目的は「発酵熱を利用した温床の作製」にあるため、水分はしっかりと含ませ、引き続き切り返しを行った。

また、畑作りも今日から始まった。この1週間、継続的に農業に関わってきたため、子ども達の農業への興味・関心は最大限引き出されていた。畑作りとなると、いよいよ子ども達が想像できる農業のあり方に近いせいか、非常に意

欲的な活動となった(図12)。

3.2.8. 平成26年4月23日(木)

この日、いつものように登園後すぐに、ビニールハウス内の様子を見に行く年長Mちゃん。すると、何とわずかだが、図13のように、まばらに発芽している状況を目にした途端、急いで他の子にも「みんな、芽が出てるよ!」と報告しに行った。早速皆で集まって、芽を観察した。その様に、年少Tちゃんが「うわ〜可愛いね。トトロみたい」と呟きながら、踊っていた。突然、年長Aちゃんが、「これは違うよ」と抜き始めたので、一度制止したが、窪川氏に確認すると、何とそれは雑草であった。彼女は、家が農家であるため、野菜の芽と雑草との見分けをつけられたのである。これには、保育者もひたすら感心であった。小さな芽を皆で囲みながら、「美味しくなあれ」と言いながら、収穫の時間を想像し合った。

3.2.9. その後

その後、第一弾で蒔いた種は8割方発芽と、高い発芽率をみせた。ぼかし肥も、微生物を活性化させるため、水遣りは毎日欠かさず行い、温度も大体30~40℃位を保った。5月7日(水)には、第二弾の種蒔きを行い、ズッキーニやかぼちゃ、トウモロコシ等を蒔いた培養土ケースを、ぼかし肥の上に載せておいた。こちらも、順調に発芽し、成長していった。

温床としての役目を終えたぼかし肥は、乾燥させ、苗を定植したちいろば畑の追肥として活用した。定植後の各種野菜は、成長の差こそあったが、どの野菜も無事に収穫でき、家に持ち帰ったり、そのまま生で食べたり、夏のお泊り保育時のカレーライス作りの材料にも活用した。

4. まとめと今後の展望

今回の「ぼかし肥作りから始まる子ども達の農業体験」で興味深い点は、ぼかし肥を単に施肥の目的で作成するにとどまらず、例年の腐葉土踏み込み温床の代替温床として活用できないか思いつき実践した所にある。寒冷地に暮らす農家にとって、温床の出来不出来はまさに死活問題であり、今年度、織座農園は未曾有の降雪の影響で、早急な対策を講じなければならなかった。窪川氏は、これまでの幅広い経験から、ぼかし肥の発酵熱を利用できぬものかと考え、成功の確証が持てぬまま切羽詰まった状況の中で実践しつつ学んでいったのである。幸か不幸か、そのような農家の暮らしの中から生まれた実践を、ちいろばの子ども達も体験できることとなり、そこで皆が見たものは、まさに農家の生活の知恵だったのである。こうした知恵無しには、筆者のような門外漢には、ぼかし肥の活用など到底思いつくはずもない。窪川氏は、自らの生活が懸かっているため、気が気でなかったと思うが、子ども達は楽しみながら、毎日をぼかし肥と関わることができ、五感を使って、発見や不思議さに驚き感動することができたのである。実践報告にみられる子ども達の様々な

発言や言動に、それは顕著に見受けられる。

幸い、ぼかし肥はよく発酵し、その発酵熱のお蔭で発芽、そして苗の成長も申し分ないものとなった。そして、ぼかし肥は、本来の役目である肥料としての役割も果たし、農業体験としては息の長い、意義深い活動となった。

継続性を持って、毎日ぼかし肥と関わる体験ができたのは、多忙にもかかわらず、園の活動に深い関心と理解を示して下さった、地域に暮らす織座農園の窪川氏の多大な協力があってこそである。園で働く保育者以外の大人が、保育の日常に生活しているということ自体、大変稀有なことであり、それだけではなく、子ども達を農業に引き付ける様々な言葉を投げかけて下さったことも、子ども達のモチベーションを保つためには大変重要なファクターとなり、その存在は大きい。子ども達のみならず、保育者も園生活を送りながら、同時に農家の生活も垣間見、何がしかの農業体験が毎日できるという環境が、このちいろばにはあるということが、何より幸せな事であり、保育の地域連携という一つの事例になり得るのではないかと期待している。しかし、こうした密な関わりは、園が柵で囲われていて、園内で活動を完結させてしまう機関や、あるいはカリキュラム絶対主義を貫くのであれば、中々実現できることではない。こうした地域連携の在り方は、園舎を必ずしも毎日の保育生活を送る場所とは考えず、自然や生命が感じられる場所に自らの体と心を傾けていくことを大事に考える森のようちえんだからこそ、比較的容易に、実現可能になるのではないかと思う。ちいろばにとっては、園内でできる保育活動のみならず、積極的に子ども達と地域に出かけて行き、物的或いは人的資源を掘り起こしながら、継続的な活動を考え、生み出していくという作業も、今後の保育を支える大きな柱になると考えている。それでこそ、地域連携を理想とした、ちいろばならではの保育活動の特色化が、より充実していくのである。

今後は、農業部門でのテーマを持った連携は

もちろんのこと、例えば、地域の林業や漁業、福祉施設や学校関連機関との連携も、考えようによってはできるのではないかと、その可能性を探っている。活動する枠に捕らわれない、森のようちえんのフットワークの軽さを活かしながら、地域の暮らしを保育生活と繋げていく事の意義深さを、今回ぼかし肥を通して学べたことは、大きな財産になったということは、言うまでもない。

註

- (1) 本制度に関しては、以下長野県のウェブサイトを参照のこと。

(http://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/kyoiku/kodomo/shisaku/morino_yochien.html

Accessed 2014.11.20)

- (2) 以後、「森のようちえん ちいろば」を略して、「ちいろば」と記す。
- (3) 国内外問わず、園舎を持たない森のようちえんも数多く存在する。ちいろばは園舎を持つが、園舎を拠点と定めているわけではなく、今年度のように、拠点を変えて活動することもある。自然が先生であり、自然のあるところがどこでも園舎のような機能を持つという考えを持っている。

引用文献

今村光章 2011 『森のようちえん—自然のなかで子育てを』 大阪：株式会社解放出版社

農山漁村文化協会編集部 1993 『ボカシ肥のつくり方使い方』 東京：農山漁村文化協会